
始まりの魔法使いと運命

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりの魔法使いと運命

【Nコード】

N8042Z

【作者名】

ハル

【あらすじ】

男は死んだ。それに理由なんてないし事情もない、よくある有り触れた事件のような死に方だ

そんな彼は生前のつまらなさを憂い神の玩具になることを承諾する行先はFate、チカラはラスボスクラス

ーーーーでは、せいぜい神を楽しませるとしよう

プロローグ（前書き）

今夜2作目の新作投稿のハルさんでございます

F a t eファンに怒られないとよいですね…………びくびく

ブローグ

さて、いきなりだが俺というちっぽけな一個人の話に僅かでも良いから耳を傾けてほしい。なに、時間は取らせないさ

俺は平々凡々を体現したかのような至極普通な何処にでも居る一般人だと自負している。事実、周りからの評価も大差ない

強いて挙げればサブカルチャー、所謂、マンガやアニメといったものは人並み以上に詳しいと言った特徴も無くはないかな

なにが言いたいのか、と？ そうだな、最後に現状の確認といかせて貰うでしょう。そら、時間は掛からなかっただろう？

俺が今現在存在しているであろう場所は、前後左右斜め上下に至るまでが全て白でホワイト一色と呼べる。ちなみに地平線の彼方が見えるほどに見事に物が視認できない

そんな中、俺は生前と同じ姿形にて今思考に耽っている………あ

あ。今の言葉でわかってもらえただろうか

俺は死んだ

死因？ 一家心中だよ、父が借金を作ったのが発端という三流小説にでも見受けられそうな理由でな。全く以て馬鹿らしい

まあ特に今生に未練はなかったから構わないがな。目立たず地味に成り過ぎず、多くも広くも少なくも狭くもない交友関係だった

故、俺を表面上は悲しむ奴らは居よう。しかし日が経てば忘却の彼方へと追いやられる、俺というのはそれだけの価値しかないのさ

「ふーん、中々に愉快的な思考回路してやがんな」

……………驚いたな

ああ生前にも片手で数えられる程にしか驚愕した経験はない、だからこそ驚いた

少なくとも俺が生きていた頃には見ることがないからなーー人が空中から此方を見下してくるなど。いや貴重な体験をした、活か

す機会は永久に無いだろうが

「まあ良いや。おいお前マンガとか好きなんだろ

俺は神様でチカラとかやるからもう一度人生やり直せ

ちなみに確定事項だから返答は聞いてねえ

ついでにお前は俺が殺した、ミスとかじゃねえからそこんとこ履き違えんなよ」

了解した、チカラとは何をくれるのだろうか

「おうおう話がスムーズで良いな、それでこそ人間だ

今までの奴らは喚くばかりで五月蠅かったから余計にな」

生憎とこういった性格なんだ、感情が無い訳ではないが平均よりも希薄でな。それで

「わあってるよ、行き先はFateっつー世界だ

あそこで俺様の暇潰しのために暴れてこい、お前は従順だから能力くらいは決めさせてやんよ」

有り難い。では暫し待ってただけるだろうか、考える時間を頂きたい

「時間の流れなんざあつてないようなモンだ、気にしなくても問題ねえよ

ちなみに決めないなら強制的にDiesの聖遺物だかな」

把握した、ではどういったチカラにするでしょうか……

このような状況は生前にも二次創作と呼ばれるジャンルの小説にて経験済みだ

ならばチートと呼ばれるような能力を要求するのが吉なのだろう、彼方も「暇潰しのために」と言っていたのだからな

となると個人で無双の武を発揮するよりは組織だった世界征服系が望みだろうか、ふむ……

では……のチカラを戴きたい

「ほう、良いんじゃないの。しかしやっぱ変わってるよお前」

褒め言葉と受け取らせてもらつよ。ああついでに多少の魔改造をお願いしたい

「俺に指図すんな、まあ面白そうだから不問にしてやるけどよ。ほらよ」

感謝する、これで貴方を満足させられれば良いが

「今までの奴より期待は出来そうだな、んじゃ行ってきやがれ」

足元に穴か、王道だな

そして俺は得たチカラと共に元いた世界から見て異世界へと降り立つ、ただ彼を楽しませるためだけに――

ブローグ（後書き）

感想・指摘・批判・評価・お気に入り・レビューお待ちしております

始まりの魔法使い（前書き）

今回は……今回も、短めです

では

始まりの魔法使い

まず俺に意識が戻ったとき、そこに在るのは「無」だけだった。

神よ……まさか創世記か？　ここは。確かに俺の授かったチカラならば良いのかも知れないが

仕方がない、とりあえず世界を造る所から始めよう。使用用途は魔法世界の再現ぐらいにしか思っていなかったのだがな

まずは「鍵」を想像する、巨大で強大なチカラの形。それが「鍵」だ

その名を「コード・オブ・ザ・ライフメイカー造物主の掟」という

とある魔法使いの少年が教師をするマンガにて、ラスボスであった造物主のチカラだ

作中では特に戦闘力は明かされなかったが、描写から推察するにラカンよりは強くナギと同等には強いのだろう。それとおそらくだが全ての魔法を使えると見て問題はないはずだ

……F a t e世界から見たらかなりハチャメチャだがな。魔法の域である飛行を難なく行ったり、一時的に雷の上位精霊と化す等々

まあとりあえず創ろう、俺は魔力量も造物主並になっているらしいからな。実質無限に等しいと思うのは間違っていないだろうよ

……うん、思考の片手間に創造してみたが意外と可能なんだな。銀河系の誕生だ

………そういえば、ベースとなる惑星がある訳でもないのだが。何故に創れたのだろうか

未元物質のようなモノでもあったのか、はたまたチリやガスを媒介として創造したのか………創れたのだから良いか

まあこちらの世界は放置しよう、原作F a t eと同じになるように。その代わりに火星ベースに魔法世界を作り、俺はそちらに住もう。たまにこちらにも顔を出さなければだが

………ふむ、やはり魔法世界は明確なイメージがある分つくりやすいな。次は魔法世界の生命の創造を行おう

原作で生命を生み出すシーンがなかったので生命は創れないのではないか、と思ったが創れるのだな

とりあえず人の祖先、そして獣人なども放り込んで……これで後は人類に進化するのを待つのみだな

魔法世界に墓守人の宮殿を創り浮遊させて、と……寝るとしよう。チカラの連続使用で些か疲れた

次目覚めたときにはどうなっているのやら

……余談だがF a t eってアニメ見たくらいなんだよな、問題ないと良いが

世界最古の英雄王

……………ん

ふう、なかなか休めたな。さて今世界はどうなっているのだろう

遠見の魔法にて覗いてみるとしよう、本格的に神のような感じになつてきたが、まあ、大丈夫だろう

さてまずは魔法世界を……………ふう。疲れが残っているのだろうか？ はたまた新手のスタンド使いか

既に原作と同等に進化・繁栄しているだと……………？ いや、おかしくはないのか？

原作の造物主の言葉から察するに魔法世界の歴史は2600年ほどしかない。もしくは最低2600年かもしれないが

つまりは2600年あれば同等になるのは至極当然なのだろうか……………というか俺は2600年も眠り続けたのか、規格外な

そして街中に俺に似た像があったのだが、ちなみに俺は造物主の格好をしている

造物主は神として知れ渡ったのか……？ いや別段、魔法世界を消すなどといった目論見は皆無なので存在が知られた所で一向に構いはしないのだが

……その内に姿を晒しておこう。「完全なる世界」を設立し、原作メンバーをトップにでも据えようか。うん、良いな

次は現実世界、さすがにこちらは原作通りの筈だ。F a t e 世界ならば、だが

ふむふむ。ああなるほど理解した、今はギルガメッシュの統治する時代なのだな。見たところ未だ子ギル状態のようだが

子ギルはホロウ限定だったか、見たことはなかったのだよな……
…二次にて存在することは知っていたが

まあとりあえず接触を図るとしよう、関係を持つことは良いことだ。あわよくば友好的関係を築きたいしな

彼は同等以上の存在ならば朋友にする可能性がある。現に彼の唯一の友エンキドゥは神がギルガメッシュを妥当するために遣わした存在らしく、ギルガメッシュと同等のスペックを誇るらしいからな

まあネギまの魔法と造物主のスペックならば引けはとらないだろう……おそらく。絶対にと言えないのが怖いところだ

アーウェルリンクスを早急に造るべきだな、特に3番目と6番目を。何故かと問われれば趣味だがなっ！

まあ別に原作を見る限りではアーウェルリンクス以外の人形シリーズも存在するようなんだよな、炎と水の2人が

正直アーウェルリンクスにも同属性の使い手がいたから影が薄い、何のために居たのか軽く謎だな

おっと考え事に没頭しすぎだな、反省反省。とりあえず多分にたぶんを含むがアーウェルリンクスを創ってみよう…………

あれから数日が経過した。そして結論から言おう、アーウェルンクスは創れた、果てしなく疲労困憊だが

カラダ自体はそこまでの難易度ではなかったのだが……やはり性格の再現、およびスペックの調整が大変だった

原作でも何故か調整はデユナミスが行っていたようだしな……早々にあちらを見つげ出すべきだったか？

まあ過ぎたことは過去へと流すが得策だろう。とりあえず転移にて表世界の……バビロニアだったか？そこへ行かねばな

――――

舞台は変わり、旧世界、バビロニア。その都市にその少年はいた

黄金に輝く髪、血のように真つ赤な瞳を持ち、溢れ出るカリスマを抑えようとしめない、王気^{オーラ}溢れる、この世のモノとは思えぬ美しさを携えた少年

その名を、ギルガメツシュという……

「ふふつ、今日も僕の街は平和です。まあ僕が統治しているのだから当然ですけどね」

ギルガメツシューー長いので子ギルとしようーは世界を統べる王だ。この様な少年でありながらそれを成すには並々ならぬ苦労が……

「ないですねえ

ほら僕って文武両道、天下無敵、才色兼備　を地で行くような完璧超人ですし？

この世界は最初から僕のモノになるのを義務付けられてるんですよ」

……なかった。彼は事実、その言葉の通りに、まるで最初から決まっていたように世界を手中に収めた

それこそ最初から存在した線をなぞっていくかの如く

ギルガメッシュは暴君である、しかし子ギルは未だ良き王であった。多少、自分絶対主義の片鱗は垣間見えていたが

「ふふふ……ん、珍しいですね。侵入者ですか」

侵入者の気配の感知など、彼の持つチカラに掛かれば容易な事なのだろう

それは侵入者が気配を隠しもせず、むしろ呼び寄せるかのように気配を出しているからなのだが

ほんの少しだけその事を考え、止める。

「僕は王です。王たる者が侵入者程度に狼狽えて如何します?」

そして彼は侵入者の居るであろう方向へと歩を進める

「正々堂々と正面から尋常に捻り潰して差し上げましょうか」

――

片や造物主側

「……………気配とは、どのように消すのだ？」

「しっかりしてくれないか、マスター」

「我が主、お気になさらず」

世界最古の英雄王（後書き）

感想・指摘・批判・評価・お気に入り・レビューお待ちしております

邂逅する者たち（前書き）

おそらく今年最後の投稿になりますかね

というか3話しか投稿してないのに総合評価が400を超えた……
！？

邂逅する者たち

あの後、転移魔法にてバビロニアへの侵入をあつさり果たした

ギルガメッシュならば罨や防壁の一つでもあるだろうと危惧していたが……杞憂だったか？

それか異文化の魔法には反応を示さない、という可能性もあるがな。ふむ……

「いや、迎撃や防御系のモノはないけど侵入を知らせるようなものがあるよ」

「そうか……ということはヤツが出向いてくるのだろうな」

「我が主、ご安心を。私とテルティウムが居る限り主には視線すらも寄越させません」

うむ、頼もしい。いくら俺が造物主のチカラを持っていようと所詮は素人だからな

それに比べてアーウェルンクスは魔獣討伐や悪人捕縛などをさせて経験値は積ませたから俺よりは強いな
俺も付いて行ったが出番はなかったさ、はっはっは

もはや魔法世界にて軽く話題になっているらしいしな

…………… ああ念のため言っておくが^{テルティウム}3番目と^{セクストウム}6番目だぞ？
別に他のでも良いが、この2人が好きなだけだ

セクストウムは好み、テルティウムは言わずもがなだろう。

むしろこの2人を嫌いと言うのはネギま好きとしてどうなのだろうか

「まあセクストウムは嫌いな人もいるかもしれんな……………」

「我が主、お呼びでしょうか？」

「む、いや気にせずとも良い。たんなる独り言だ」

危ないな、無駄に聴力を良くしたのは早計だったか？
いや身体能力を高めるならば避けては通れないか……………

「マスター、セクストウム。そろそろじゃれあい終わってもらえるかな……………来る」

ガキン、という硬質な音と共に俺の眼前に武器が飛来した。というか飛来していた

造物主スペックなのに反応できない俺という奴は……………やはりすぐに強くならねばな

そして俺へと向かってきた武器の類はすべて障壁を貫くとまでいかずに地へと落ちる

セクストウムとテルティウムも同様だ、ふむ。真名解放を行わなければ基本的には防ぎされるか……………

あとはギルガメッシュの場合、エアの一撃を警戒しなければならぬが……………というかアレはさすがに無理だろうな

そもそもが神の創りし世界を切り裂くような代物だ俺程度の障壁など障子紙と同じ容量で裂けるだろうな

「へえ、僕の攻撃を防ぐなんて中々やりますね」

その言葉が耳に届くと同時、その空間を満たす王氣^{オーラ}

俺でも充てられてしまうのだ、普通の人が彼にかしずいてしまうのは仕方がないことだろう。

さすがカリスマA+、その効果は魔力・呪いの類とは良く言ったものだな

「いきなり訪ねてしまった無礼は詫びよう、すまなかった」

俺がギルガメッシュに対して頭を垂れると従者2人も続いて膝をつく。

セクストウムは嫌々ながらだが……………まあ大丈夫だろう

「はあ、今更そんなことを言われましてもねえ

……………我が領地へ無断で踏み込んだ罪は拭えませんか？」

「重ね重ね申し訳ない、ならば如何すれば許していただけだろうか？」

「そうですねえ……………」

考える素振りをするギルガメッシュ、しかしすぐにその動作を止

めてこちらを見据えてきた

「……………死んで償ってもらいましょうか」

その言葉よりも早く、こちらへと迫るのは幾十もの武器。
それらが俺の身体を貫いて……………

「……………へえ、これも避けるなんて。幸運は再びあなたに味方したように良かったですね」

いなかった。傍らに控えたテルティウムが石の息吹にて武器を石化・破壊

そしてセクストウムが俺を抱えて瞬動による回避をしていたからだ

「我が主に対する明確な敵対意志……………交渉の余地はありません。
我が主、排除の許可を」

抱えていた俺を優しく下ろし、敵を睨みつけたまま怒気の籠もった声で問うてくるセクストウム

「僕もいい加減イライラしてきてね……………
マスターに一度ならず二度までも攻撃を加えたんだ、覚悟は出来るだろうさ」

そんな2人とギルガメツシュの間に立ちふさがり、普段の無表情ながらもギルガメツシュを睨み付けるテルティウム

「ハア……………出来れば穏便に済ませたかったのだがな。良い、許す。存分にやれセクストウム、テルティウム」

諦めと共に告げられた俺の言葉に対して、こちらからは確認することは出来ないが

「……………了解!」

2人が微笑んでいたことを……………当たり前だが俺は知らなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042z/>

始まりの魔法使いと運命

2011年12月31日17時52分発行